

実践意欲と態度を育てる道徳科

～互いにつながり合う授業～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち～子どもの言葉でつくる授業～」を受け、道徳科では、「実践意欲と態度を育てる道徳科～互いにつながり合う授業～」を教科提案にした。

学習指導要領において、道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とある。

道徳科では、道徳的価値を自分の問題として捉え考えて、友達との話し合いを通して、自分の考えを変容させたり深めたりと、「よりよい生き方」を再構成していく子どもたちの姿を「問い続け、学び続ける子どもたち」と設定する。

授業の中で、「〇〇することって大事だな」「〇〇するっていいな」と道徳的判断力や心情は培われても、実践意欲や態度につなげることに結び付かないという課題がある。態度につながらないという理由の一つには、授業のねらいとする道徳的価値の理解はしているものの、いざ行動に移すとなると、他の要素も関わってくるものがあげられる。例えば、周囲の目が気になることや、ほんの少しの勇気が出ないこと、経験不足から実行に移せないこと等である。しかし、授業のねらいとする道徳的価値を自分の問題として捉え、自ら考え身につけていこうとする意欲を呼び起こすことができれば、実践意欲や態度につながっていくのではないかと考える。このように、自分の問題として捉え、「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿を目指すことで、実践意欲や態度につなげられることができると考える。

また、「よりよい生き方」の再構成は、自分の考えを表現したり、友達の考えに耳を傾け理解しようとしたりする中で生まれるであろう。授業の中で、道徳的価値と自分の生活、自分の考えと友達の考えが“互いにつながり合う”ことを大事にした。

(2) サブテーマとかかわって

①道徳科における言葉とは

学校提案にもあるように、道徳科でも、言語以外に、表情や仕草、視線なども「子どもの言葉」として捉える。特に、友達の思いに「なるほどな。」と共感したり、「ちょっとぼくとはちがうかも。」「そんなに思うのはどうして？」と首をかしげたり、疑問に思ったりする仕草や表情をみとり、子どもたちの言語につなげた。

②子どもの言葉でつくる道徳科授業

30人いれば30通りの思いや考え方があがる。また、同じ言葉で表現されたとしても、その思いは同じであるとは限らない。例えば、「うれしい」という言葉にしても、うれしさの程度やその理由はこれまでの経験の違いからも変わってくる。それぞれ違う思いや考え方、経験を出し合い、絡ませ合うことで新たな見方や考え方が子どもたちに生み

出されるであろう。子どもたち同士で、「そう思うのはどうして?」「ぼくは〇〇と思うんだけど、もう少し詳しく聞かせて。」と立ち止まらせたい。時には、教師が子どもの言葉（表情やしぐさ等も含めて）を捉えて、全体に返し、それぞれの思いや考えを交流させた。

（3）道徳科でめざす子ども像

○自己を見つめる子

道徳的価値の理解を図るためには、これまでの自分の経験や、その時の考え方や感じ方と照らし合わせながら考えを深めることが重要となってくる。授業の中では、「ぼくも前にね、・・・」「わたしだったら・・・」と自分の問題として考えることができるようにした。

○相手の意見や考えを受け入れ、物事を多面的・多角的に考える子

立場や経験の違い等で、考え方や感じ方もそれぞれ違ってくる。問題場面に出会った時に、多様な考え方や感じ方があることが前提にあれば、それを踏まえながら、よりよい判断ができる。多様な考え方や感じ方を出し合い、認め合いながら、その中で自分がどう判断し行動していくか考えていけるようにした。

○自己の生き方についての考えを深められる子

1時間の授業の中で、道徳的諸価値について理解し、多様な考え方もあることがわかっていく。しかし、心の弱さなどからも態度につなげることはそう簡単ではない。「今のぼくはどうだろう。」「もし、こんな時わたしだったらどうするかな。」と、今の自分を振り返ることができ、「今よりも、よりよい自分になりたいな」と、意識しながら生活しようとする子を育てた。

2. 道徳科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

道徳科では、「問い続け、学び続ける子どもたち」を次のように定義する。

①学びを追究する子ども

・今までの体験や経験を思いだしながら教材と向き合い、自分の思いや考えを積極的に表現しようとする。「ぼくも同じようなことがあったんだけど・・・」「もし、わたしだったら・・・」

②他者との関わりを大切にしている子ども

・友達の思いや考えに耳を傾け、自分の考えや思いとは少し違うなと思うところは尋ねたり、理解しようとしたりする。「ぼくは、～と思うんだけど、〇〇さんはどうしてそんなに思ったのかな?」

○学びを実感する子ども

・様々な思いや考え方があることをもう一度自分の中で納得し、自分はどのようにしていきたいかを言葉や文に表したり、そうありたいと願って、実践意欲や態度につなげようとしたりする。「今のわたしはどうだろう・・・」「ぼくは、これから・・・」

（1）実践事例

3年生「友だち屋」より

キツネが、オオカミに、「友だちから金をとるのか。それが本当の友だちか。」と言わ

た時の、キツネの気持ちを考えた。子どもたちは、「こわい」「はらがたつ」「いやな気持ちになった」等の発言が見られた。しかし、まきは、「うれしかったと思います」と発言した。それを聞いた他の子たちは、「ほんまや、ほんまや」とつぶやいた。見たままのオオカミの挿絵から

みはる：キツネはなんでうれしかったかという、オオカミが友だちになって嬉しかった。

キツネはこわかったけど、嬉しかった。

いひと：でも、友だちにはやさしく言うんじゃないですか？

みはる：すごくうれしいからきつく言った。

いひと：それやったら、そんなにきつく言わないんじゃないですか？

みはる：ほんとうに嬉しいからきつく言った。

< 略 >

ひろし：本当の友だちなら言わない。

教師：本当の友だちになっていないの？

ひろし：友だちになっていたらけんかもするけど、きつく言わない。

「ぼくも前にね・・・」とは言っていないものの、子どもたちの発言の中には、普段自分が意識している友だちとの関わり方や日常生活の様子が重ねられている。いひとやひろしの「友だちにはきつく言わない」は、日々の生活の中で、彼らが心がけていることである。教師は、自分の生活と重ね合わせた発言を読み取り、子どもたちに返してあげること、教材と自分の生活が結び付くことができる。

3. 研究の展望

「問い続け、学び続ける子ども」を実践するために、以下に重点をおき研究を進めていく。

(1) 子どもの個々の道徳性をみとる

日々の行動の様子や日記・作文から読み取れる思いや願い等から、子どもたちの物事に対する感じ方や道徳性を見とる。そうして、教材の精選や内容項目の分析に生かす。

(2) 各教科・領域等や道徳科を関連させ単元を組む

一人一人が、道徳的価値を自分の問題として考えることができるように、各教科・領域等と関連させた単元を組む。単元を計画するにあたっては、各教科・領域等での道徳の内容項目を吟味する。事前の学習は、子どもたちが道徳的価値への興味・関心を高めるようにした。そのため、活動や体験を十分行うようにした。道徳の学習においても、事前・本時・事後と、連続性をもたせた。さらには、道徳科の授業の中で養われた道徳的諸価値を各教科や領域、日常生活で実際に発展できる場を設定し、行為へ移すことができるようにした。道徳科の学習を中心に、事前の学習と事後の学習を設定し、全教育活動と関連させた単元を組むことで、自分の問題として捉え考え、実践意欲や態度に結び付けることができた。

(3) 魅力ある教材

子どもたちにとって、「問い続け、学び続けたいくなる」魅力ある教材との出会いも大事と考える。上記の(1)とも関わり、子どもたちが興味関心を持ち、教材と自分を近づけることができる教材選びが大事となってくる。

①資料の精選

子どもたちが興味関心を持ち、感動や共感を呼ぶものとして、感動資料や実話、和歌山県の話などを取り入れるようにした。

②子どもの意欲を引き出すための工夫

子どもたちが、自ら「話したい」「考えたい」と思えることがまずは大事である。そのためにも、紙芝居や挿絵、写真、映像、効果音などを効果的に取り入れ、子どもたちの意欲を引き出すような教材の提示工夫が必要である。1時間の流れを振り返り、子どもの心に深く残るように「心の動きがわかる」「思考が深まる」板書を工夫した。

③中心発問の吟味

子どもたちの一番心に残ったことから話し合い、焦点を絞り、価値に迫るようにする。そうすることで、自分の問題として捉え、考えようとするであろう。主人公が価値にする場面を中心場面とする。この中心場面で、道徳的価値に迫れるような発問を吟味した。

(4) 安心して自分の思いを出すことができる学級風土

多様な考えや感じ方があるから、日々の生活でも衝突したり、言い合いになったりする。これまでの生活経験からも一人一人の考え方や感じ方は違ってくる。そのような多様な考え方や感じ方を受け入れ、認め合うことができるためには、安心して自分の思いや考えを出すことができる学級風土が大事となってくる。互いのよさを認め合えるような学級集団の中ではより一層、新たな見方や考え方、感じ方が生み出されるであろう。友だちの考えを受容してから発言できるような話し方を学級で共有したり、時には、ペアやグループでの話し合いを取り入れたり、表現力や聴き合う力も高めた。

4. 研究の評価

道徳科の授業については、授業内での「子どもの言葉」や1時間の振り返りの記述(ワークシート)から、①自分の問題として教材と向き合えたか、②自分なりに「よりよい生き方」の再構成につなげることができたかをみとった。しかし、それだけにとどまらず、子どもたちの学校生活全般の行動の記録を適宜とったり、時には子ども自身が自己の成長や生き方についての振り返りを記述したりするを通して評価した。